

### 1. 食と身体性の五感デザインによるウェルビーイングの促進

研究代表者：[和田 有史（食マネジメント学部）](#)

本プロジェクトを軸としたオープンイノベーションハブの確立を目指した活動に力を入れた。その成果として、新たな油脂の感覚受容システムを探求する「ナノエマルジョン技術による植物性脂質・蛋白質の食味改善の基盤の領域横断型研究」を大阪大・農研機構・東京歯大・立命館大の研究グループで申請し、科研費基盤研究（A）に採択された。

本研究の一環として、バーチャルリアリティを用いた視野狭窄の再現と音声による視野拡張の可能性や動物性食品による満足感を測定する時間的印象変化測定法の開発、喉頭摘出者の後鼻腔経路嗅覚回復についてのデバイス研究開発、生成 AI 画像を用いた研究、などを行った。

本プロジェクトには専門研究員 2 名・助教 3 名が含まれており、現在、全員が科研費（若手研究・研究活動スタート支援）を獲得している。また、2025 年度には若手研究者らが参画した査読つき論文が 7 報受理され（うち 4 報は国際誌）、前期課程の大学院生も査読つき論文の投稿に至っている。これらの実績は、本研究に参画した若手研究者が着実にキャリアアップしていることを示している。

### 2. 地域史に投影される国際的諸要素の研究－近江兄弟社の事例を中心に

研究代表者：[金丸 裕一（経済学部）](#)

2025 年度においても、本プロジェクトに参画した専任教員のみならず、学部学生や大学院生を含む学内若手研究者による活動は順調であり、可視化される成果を生み出した。

第一に、学部生メンバーであった中尾まこによる単著論文「近江兄弟社で語られた中国／アジアイメージ」は査読を経て学術誌に掲載されたが、当該主題における本格的実証研究の嚆矢として高い評価を得ている。第二に、本年もまた教員のみならず大学院生が全国規模の学会で研究報告を行い、本研究班で培われた力量を遺憾なく発揮した。また、三回生メンバーである城所由妃子がナショナル・トラスト研究奨励賞を受賞するなど、社会からの評価も次第に固まり始めた。第三に、当該テーマと関連する国際会議・国内会議を共催し、数多くの参加者を得るとともに、その成果も順次公開されつつある。

今後ともこうした実践の場を若手研究者に提供し、個々人のキャリアアップに資する活動を、今後とも積極的に進める所存であると同時に、その背後に存在する史料発掘などの地味な基礎的作業についても、飽くことなく続けたい。

### 3. 巨大地震・感染症等の自然災害が及ぼす影響に関する国際地域経済の数量分析

研究代表者：[橋本 貴彦（経済学部）](#) 

プロジェクトの目標は、「3.」復興からの被害の回復の検証であり、多くの研究成果を出すことができた。「4.」若手研究者については、プロジェクトメンバーから専門研究員を輩出するなどの成果があった。「5.」プロジェクトの研究成果の一部をダッカ大学等と共同で国際会議を開催し、現地（バングラデシュ）で報道機関に公開した。「6.」研究助成についても採択

の結果をまだ得ていないが、科研基盤 B および C を申請し、民間財団についても申請することができた。

主な研究成果として、*Journal of Economic Structures* 等の英文ジャーナルでの論文掲載し、中京大学経済研究所との共同作業を行い著書を出版できた。加えて、社会システム研究所の紀要への成果報告をすることができた。それらの内容であるが、新型感染症による経済的影響が、滋賀県内に与えた影響を既存のデータをもとに可視化し整理するというものである（武田・稲葉・橋本（2026））。この研究の資料は、プロジェクトで前年までに作成した滋賀県地域間産業連関表を用いている。奨励研究から出発して重点研究に採択された後の作業が成果に反映されているといえる。

#### 4. 社会的意思決定としての食選択 - 実験・調査研究

研究代表者：[安井 大輔（食マネジメント学部）](#) 

本研究は(1)食品リスクを典型とする不確実性を伴う食、特に環境改善等の公共目的を伴う有機栽培食品の消費行動に焦点を置き、(2)不平等回避以外の社会的選好に基づき選択行動の要因を特定しようとするを目的に研究を進めた。具体的には、社会的帰属意識に焦点を当て identity 理論に基づく内集団意識とフーディ（食を自身のアイデンティティやライフスタイルとしてとらえる人びと）による顕示選好など、社会学や地理学の近年の潮流を踏まえ、行動・実験経済学的手法により、有機食品の消費行動の特殊性、ひいてはフーディの実態に実証的に迫ろうとするものである。2025 年度の実績としては、学内教員による論文や共著テキストの分担執筆、国内外における学会や学外での研究会での報告、および合評会やテーマセッションの開催、報道発表や講演会など、成果発表を積極的に行った。これらの実績に基づき、科研費・挑戦的研究（萌芽）に申請を行った。若手研究者メンバーは学内教員の指導の下、経済学実験や現地フィールド調査を進めていき、本研究プログラムの成果をも含む形で、博士前期課程学生は全員修士論文を完成させることができ、博士後期課程学生も博士論文執筆を進めることができた。

#### 5. ミライの学校教員の価値：AI・メタバースとともに教育をリデザインする挑戦

研究代表者：[山中 司（生命科学部）](#) 

本研究は、AI・メタバース時代における教員の役割を再定義することを目的として、立命館守山中学校・高等学校をフィールドに実証研究を行った。特に、保健室を起点とした「デジタル保健室」の構築と、外国語教育(英語)への応用を進めた。これらの取組は、第 56 回中日教育賞および第 1 回立命館アワード（本賞）を受賞するなど高い社会的評価を得た。また、プロジェクト発信型英語プログラム（PEP）における AI を活用した英語教育モデルについても、代表の山中らのチームが同アワードを受賞した。さらに、文部科学省事業への参画や書籍刊行を通じて、研究成果の社会実装と発信を推進した。また、研究の過程において、外国にルーツを持つ子どもたちの増加に伴い、教員と保護者の間で板挟みとなる子どもが抱える課題として「ことばのヤングケアラー」という新たな研究テーマを見出した。この課題は教育・福祉・

言語を横断する重要な社会課題である。そのため、次年度以降は研究チームの高度化と異分野連携の強化を進め、本テーマを中核としたより社会的インパクトの高い研究プロジェクトへと発展させる予定である。

(以上)